

漢法苞徳塾資料	No. 048
区分	診断
タイトル	気血の判定問題
著者	八木素萌
作成日	1991.07

◆気血の判定問題では

『鍼灸問対』（元：汪機）に「病ノ血分ニ在ルモノハ沈著シテ移ラズ 病ノ気分ニ在ルモノハ遊行シテ不定」「病風ヲ以テ之レヲ言エバ……移動シテ常ナラザル者ハ気分ナリ、……著シテ走ムカザル者ハ血分ナリ、凡ソ病ハ皆然ラザルモノ莫シ」と言う。「上有病 下取之 下有病 上取之 在左取右 在右 取左」（上ニ病有レバ下ノ取ル、下ニ病有レバ上ニ取ル 左ニ在レバ右ニ取ル 右ニ在レバ左ニ取ル）と述べ、さらに続いて――血分の刺法――「在血分 随其血之所在 応病取之」（血分ニ在レバ 其ノ血ノ所在ニ随ッテ 病ニ応ジテ取ル）と述べている。（註－八木素萌）

『内経』には、病の所在の上下に対応する取穴としては、「標本根結」の記述があると言えるのではないかと。また、病の所在の左右には繆刺・巨刺の記述がある、繆刺は絡に病がある場合と言い、巨刺は経に病がある場合と言う。然し、此处での、「絡」の病と「経」の病の「経」と「絡」を病位論的にはなく診断問題として臨床論的に明解にする必要があろう。

◆補瀉の決定問題

『難経』「八十一難」には補瀉の決定は病の虚実によれと言う。病の虚とは、病勢は遅滞して緩慢で症候も不明瞭で発症の様子も時期も定かでは無いもの、病の実とは、病の症候も病の変化も激甚であり、発症も明確で病勢も変転が明解なもの、と「四十八難」の記述を、汪機その他が敷衍している。また『鍼灸問対』は『内経』の説「形氣不足 病氣有余 是邪勝也 急瀉之 形氣有余 病氣不足 急補之……形氣有余 病氣有余 此陰陽俱有余也 急瀉其邪 調其虚実」を引用して「病氣不足」について補足説明を加えている。「夫レ形氣トハ 氣ハ口鼻中ノ喘息ヲ謂ウモノナリ 形ハ皮肉筋骨血脈ヲ謂ウモノナリ 形ノ勝ツモノハ有余ト為ス 消瘦スルモノハ不足ト為ス 其ノ氣ハ口鼻中ノ氣ニ審ラカナリ 労役シテ故ノ如キモノハ 氣ノ有余ト為スナリ 若シ喘息シテ氣促シ 氣短ニ 或ハ以テ息スルニ足ラザル者ハ 不足ト為ス 故ニ曰ク 形氣ナルハ 乃ワチ人ノ身形中ノ気血ナリト 補スベク瀉スベキハ 此レニハ在ラズシテ 只ニ病ノ来潮シテ之レヲ作スノ時ニ在ルナリ……精神ノ困窮シ 語言ハ無力ニシテ懶語ニ及ブ者ハ 病氣不足ト為スナリ 乃ワチ真氣ノ不足ナリ 急イデ当サニ之レ補スベシ…」とあって平明である。

◆基本鍼法(手技)とその選択問題

五臓に應ずる刺法、五体に應ずる刺法、四海刺法などは、病の深さと体成分の治療の刺法であろう。補法の手技手法は温補・清補・調和・平補・理気・調気・和強などに分類できよう。瀉法の手技手法は瀉熱・清熱・導排泄・壊決・壊血・瀉出・理血・緩結・解強急などに分類できよう。

同時にこれらの補瀉手法は、接触・浅刺・深刺・水平刺・斜刺などの施鍼の深浅においても施術目的に対応させられるであろう。此のほか刺絡と燔鍼（劫刺）の格別な治効作用の適宜な運用と、毫鍼ほかによる経脈疎通刺法や導血気刺法や輸気血刺法や、湯液の八陣（八法）に対応した治法刺法手技も選定される。